

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520709

研究課題名（和文） ミャンマーの教育行政と民族教育に関する人類学的研究

研究課題名（英文） Anthropological Study of Educational Administration and Ethnic Education in Myanmar

研究代表者

高谷 紀夫（TAKATANI MICHIO）

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：70154789

研究成果の概要（和文）：

本研究の主目的は、英領植民地時代を経て1948年に国民国家として独立し、ビルマ（バマー）族を中心に、多民族の連帯を国是として連邦精神の育成を掲げてきたミャンマー政府の教育行政と、その状況下における民族教育を人類学的に分析することにあった。その結果、教育行政、教育内容いずれにもビルマ化の強い方向性が認められ、非ビルマ族の民族教育はその政府方針を注視しながら展開していることを確認した。今後とも、関連する文化的、宗教的脈絡におけるビルマ化の動向にも注目しながら、広く同国家の文化動態に人類学的にアプローチすることが必要だと思われる。

研究成果の概要（英文）：

This research project is an attempt to present an anthropological analysis of educational administration and ethnic education in Myanmar (Burma). Myanmar experienced British colonization before the Independence in 1948, since then tries to maintain a multi-ethnic nation state, one of which important political slogan is to cherish union solidarity along with Burmanization (Myanmarnization). Bamar language and literature as majority is at the center of the national school education policy. Therefore ethnic minorities have to teach their own languages to the next generation under the pressure of Burmanization. It is necessary for any ethnologist to continue to study Burmanization phenomenon not only in educational context but also in cultural and religious ones from now on, too.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：ミャンマー、人類学、文化、民族、教育

1. 研究開始当初の背景

多民族国家ミャンマー連邦は、文化人類学及び隣接科学において未開拓のフィールドであり、同国に関する一次資料に基づく研究成果が世界的に注目されている。本研究の代表者は、1983年以來、通算約4年間の現地滞在経験を有し、現地研究者と連携しながら、現地語の運用能力を活用して蒐集した資料に基づく研究成果を、現地の国際会議及び日本国内で発表してきた。その研究の基本的立場は、19世紀後半の英領植民地化前後から、今日の政府による文化政策・民族政策の実施に至る多民族共生の状況に関して、主に民族間関係の変遷及び独立前後から始動する国家統合と国民文化形成の過程から考察することであり、特にその過程で生成する「民族」のマイノリティとマジョリティ双方の自民族意識形成、及びその表象の相互作用に着目してきた。

本研究の主対象として想定したのは「民族」をめぐる教育活動を提供する側と受容する側の両方とその相互作用である。

ミャンマーの教育の現場に関する学術的蓄積は極めて乏しい。存在するのは、教育学の立場から主に初等中等教育を対象としたものであり、必ずしもミャンマーの多民族共生の状況を考慮したものではない。たとえば、ミャンマーから教員などの教育関係の留学生を過去多数受け入れてきた広島大学に修士論文、博士論文の蓄積が若干認められるが、基本的に教育学的手法によるものであり、多民族国家という民族論的状況、愛国心と連邦精神の養成を対象としたような「民族」の脈絡に十分配慮したものでは必ずしもない。また筑波大学にも同様な研究蓄積があるが、教科教育研究の範囲内であるものが主である。また東南アジア

諸国内での比較研究という立場からは、村田翼夫（編著）『東南アジア諸国の国民統合と教育—多民族社会における葛藤—』（2001年、東信堂刊）が公刊され、ミャンマーを研究対象とした牧野勇人氏の考察が含まれているが、内容的に制度的概観に留まり、また1990年前後の時代に限定され、必ずしもその後の動向に関して十分なフォローされていないのが現状であった。

2. 研究の目的

多民族国家において、民族教育という課題は、国民形成及び愛国心の養成に関する施策と連携している。本研究においては、連邦制下の諸民族文化が、文化行政の成果を背景に、教育の現場において、どのように位置づけられて提供され、1990年代以降次第に具体化するマジョリティであるビルマ族中心の国民文化形成政策と相克していく過程において、マイノリティ側にどのように位置づけられて受容されてきたかについて、人類学的に明らかにすることを目標として設定した。

以上の全体構想から、本研究の主目的としたのは、マジョリティであるビルマ（バマー）文化中心の行政が、教育の現場においてどのように展開し、他方マイノリティ側の民族教育が、そのような政府の教育方針のプレッシャー下においてどのように対応しているかを明らかにすることにあつた。

3. 研究の方法

研究代表者が、過去蓄積してきた蒐集資料の分析、さらにまた現地で研究協力者の支援を受けながらその学術的ネットワークを活かして、調査研究と学術交流の充実を図った。

平行して、国内の研究所・図書館などで研究課題に関する資料蒐集を行うとともに、他

研究者との意見交換により、分析の深化に努力した。

さらに現地の民族学研究に多大な貢献をした故ウー・ミンナイン (U Min Naing, B.A., 1925-2004)氏が、生前「民族」知識に関してヤンゴン大学人類学科で客員教授をしていた頃の講義ノートの分析から、高等教育における民族教育の動向にも着目した。

4. 研究成果

本研究ではミャンマーの文化と社会に関する貴重な一次資料の蒐集とそれらに基づく考察を試みた。

研究成果として提示した重要な第一の点は、ミャンマーの教育行政・教育方法・教育内容のいずれにおいても、マジョリティであるビルマ (バマー) 文化中心の傾向が強く認められ、その方針にそって既存の研究も展開しており、マイノリティ側の民族教育に関してほとんど研究蓄積がないことを確認した点である。

第二に、ミャンマーでは、公教育においてビルマ (バマー) 化の脈絡において展開される状況が堅持され、マイノリティである非ビルマ族の民族帰属意識の形成につながるような民族教育は、マイノリティ自身の教育活動にゆだねられ、但し、政府の教育方針によるプレッシャー下に自分たちがあることを十分認識しながら実施されていることを再確認した点である。

第三に、高等教育、実際には「民族」知識の調査研究に参画する大学人類学科の教育内容に関して、故ウー・ミンナイン (U Min Naing, B.A. 1925-2004)氏の講義ノートから、独立以降の多民族国家における民族識別に関する彼の見解を明らかにした点である。政府情報省から出版されている連邦の精神 (Union Solidarity)に関する文献では、国内

の民族数は、135と明記されている。だが研究者の間において、その根拠が疑問視され、本研究代表者自身も、政治的脈絡において、あくまで総数としてのみ意味を成すとかつて指摘したことがある (高谷紀夫、『ビルマの民族表象—文化人類学の視座から—』2008年、法蔵館刊)。ウー・ミンナイン氏は、その問題点も認識した上で、大学人類学科の講義において、民族識別による総数135となる過程等について言及している。

以上のような研究成果は、推測の域を出なかったミャンマー (ビルマ) における民族教育の脈絡を再確認するとともに、民族識別の過程の一端を明らかにしており、同国及びその周辺の文化と社会の動態に関心のある研究者に対して引用可能な形で考察をまとめている。

今後は、それらの研究成果を国内外で発表することで、さらに議論を深化させる予定である (2011年韓国釜山で行われる東南アジア研究に関する国際シンポで発表する計画である)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. 高谷紀夫、ミャンマーの「民族」知識に関する二つのエッセイ、高谷紀夫 (編)「民族」・教育・文化化—ミャンマー・カンボジアを事例に—、査読無、2011年、5-22頁。

2. 高谷紀夫、ミャンマー観光空間の形成—東南アジアを視野に入れて、春山成子・藤巻正己・野間晴雄 (編) 朝倉地理講座—大地と人間の物語、第3巻、東南アジア、査読有、2009年、355-368頁。

〔学会発表〕（計1件）

1. 高谷紀夫、民族学者ウー・ミンナイン（U Min Naing, B.A.）へのオマージュ、ビルマ研究会（全国）、2008年5月11日、
独立行政法人日本貿易振興機構（ジェトロ）
アジア経済研究所（千葉県）。

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高谷 紀夫 (TAKATANI MICHIO)

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：70154789

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：